☆☆☆事務所だよりカラー版を島根県教育庁浜田教育事務所 HP に掲載していますのでご覧ください☆☆☆

令和５年度　**浜田教育事務所だより**　第９５号　令和５年９月２７日

◆学校教育スタッフ企画幹より（p.１）
◆学校教育スタッフより（pp.２-３）
◆総務課より（p.４）
◆各市町の取組～江津市～（pp.４-５）
◆各市町の取組～川本町～（p.６）

初任者研修学校訪問を終えて

学校教育スタッフ　企画幹　鶴野　公昭

４月より浜田教育事務所で勤務させていただいて、５ヶ月が過ぎました。初めて学校を離れて仕事をしていますので戸惑うことが多いですが、皆さんに支えていただきながら、日々初任者のような気持ちで勉強させていただいています。

浜田教育事務所では、初任者研修対象の新規採用教諭配置校に、５月から６月にかけて学校訪問をし、新規採用教諭、管理職との面談を行いました。今年度、浜田教育事務所管内では３５名の新規採用教諭の方がおられます。３月に大学を卒業された方、講師経験のある方、学校関係ではない仕事をされていた方など経歴は様々ですが、皆さんに共通していたのは、忙しい毎日を過ごしながらも、目の前の児童生徒に向き合って授業や生徒指導に取り組んでいる姿でした。そんな新規採用教諭の方々と面談した中でお聞きした声をいくつか紹介します。

- 授業の準備に時間がかかり、十分な教材研究ができていない。教科指導についての知識が不足しているので、もっと勉強しなければと思う。
- 自分一人で何とかしなくてはと思っていたが、周りの先生方に助けてもらうことが児童の学びにつながり、組織として関わることの大切さがわかった。
- 同僚の先生方は声をかけやすい雰囲気を作ってくださり助かっている。管理職の先生方にも相談しながら取り組めている。
- 見学研で授業を見ることがとても参考になっている。特に、先輩に学ぶ一日研修は１日の流れや時間の使い方など、新たな気づきがあった。
- 拠点校指導教員の先生には、指導の際に肯定的な価値づけをしていただき、頑張ろうという意欲が高まった。

面談では、教育センターでの研修や勤務時間のことなども話題になりました。昨年までと違い、教育センターでの研修が集合型になったことで、同期の繋がりが広がったり、悩みを共有したりすることはとても良かったようです。そんな中で私が印象に残っていることは次の２点です。

１つは、新規採用教諭の方にとって、同僚の先生方の授業を見ることが、とても良い研修の場になっているということです。先日、島根県立大学の齊藤一弥先生とお話しする機会があり、良い授業を１つ見るだけでも大きな学びになると言っておられました。初任者研修の授業づくりにおけるねらいは「育成したい資質・能力を踏まえ、１時間１時間の指導の意図を明確にした授業ができる」となっています。私自身の授業実践を振り返ると、このねらいを毎時間意識して取り組めていただろうか、生徒に育成したい資質・能力に迫る授業ができていただろうかと反省すると同時に、初任者研修の授業づくりのねらいは、同僚の先生方にとっても自身の授業を振り返る視点になるのではと感じています。現場の多忙感は重々承知していますが、新規採用教諭の方にとって授業を見る機会が１つ増えることが、先生方の授業力向上、人材育成につながる大切な取組と考えていただけたらと思います。

もう１つは、同僚性を高めることの大切さです。声をかけやすい、何でも相談できる雰囲気の職員室が支えになっているという声が多数あり、多忙な中でも頑張れるのは管理職の先生方をはじめ、教職員の皆さんが同僚性、校内体制の構築、組織的な対応など意識して取り組んでおられるからだと思います。その中でも拠点校指導教員の方には、６人の新規採用教諭に対して１人配置という大変な中で、研修だけでなく、児童生徒への対応、学級経営、授業づくりなど多岐にわたって支えていただいていることに頭が下がる思いです。

９月からは初任者研修第２回の学校訪問が始まり、授業研修等で各学校を訪問します。新規採用教諭の方への支援はもちろんですが、校内研究、校内体制等についても助言や提案をできればと思っています。また、指導主事にとっても学ばせていただく大切な機会と捉えていますので、何かございましたら遠慮なくお声がけください。

学校教育スタッフより

学びの連続性

学校教育スタッフ　指導主事　竹岡　七重

幼小連携・接続の取組は、小１プロブレムの対応にどのように取り組んだらいいかというところから、少しずつ課題として取りあげられてきたことは、皆さまご承知のことと思います。その時、「担任の話が聞けない。」「４５分間、席についていられない。」等の様々な問題が生じていました。それは、今考えると、遊びや生活を通して学び、成長してきた子どもたちに、「今日から学校のやり方に合わせなさい。」と言って大人の都合に合わせていたためだと思います。

私自身、幼児教育施設に訪問して、幼児期の子どもの姿を学ぶと、知らないことがたくさんありました。そして、子どもたちが不適応を起こしていたのは、「幼児教育施設と小学校では学び方が違うからだ！」ということに気付きました。今年度、研修を受けられた先生方が、まさに同じようなことを言われていたのが印象的でした。

幼小連携・接続で、子どもたちの交流というのは、当たり前のように行われるようになりました。しかし、大人同士の協働の学びはどうでしょうか。今、まさに、ここのところを取り組んでいます。

さて、皆さまは、「幼小連携・接続オンデマンド動画」はもうご覧になりましたか。今年度の始めに、島根県幼児教育センターが作成しました。これを見ていただければ、幼小連携・接続の大切さやどのように進めていけばよいのかということが分かると思います。まだの方は、是非ご覧ください。短い内容がいくつか公開されていますので、職員会議や校内研修等でもご活用ください。

今年度も管内で、積極的に幼小連携・接続に係る研修会が開催されています。合同管理職研修会、合同担当者研修会、小学校や幼児教育施設へ訪問しての合同研修会があります。どのような内容で進めているか一部ご紹介します。

島根県幼児教育センターHP
【ユーザー名】renkei2023
【パスワード】setuzoku2023

〇合同管理職研修

「互いの教育」のイメージについて、演習を通して、子どもの姿から話し合いました。

幼小連携・接続の取組について、これまでの取組を振り返り、今後、管理職として自園・自校でどんなことに取り組んでいくか、具体的な方策を考えました。

Ⅰ		なぜ幼小連携・接続が必要か
Ⅱ	❶	幼児教育の役割と特長
	❷	幼児教育で育つ力【演習】
Ⅲ	❶	接続期の子どもたち
	❷	スタートカリキュラム作成のポイント
Ⅳ		特別支援教育と幼小連携・接続
Ⅴ		雲南市立斐伊小学校区の取組 ～R4年度　幼児教育推進研修　実践発表より～

是非、オンデマンド動画へ！
11 月には PR 動画も配信します！
乞うご期待！！

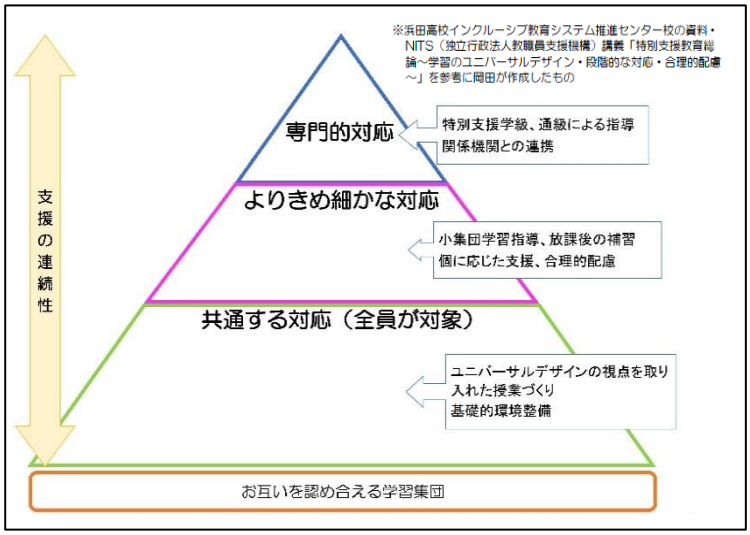
感想

・接続の必要性がやっと理解できた。
・子どもを見る視点を合わせる機会をもつことがとても大切である。
・子どもたちがワクワク感をもてるよう、そしてそれが続くよう職員でも幼小連携・接続について話していきたい。
・できるところから始めたい。まずは、管理職が訪問したい。
・保育園の取組を理解し、園児が何を学び、どんな力を身に付けているのかを認識したい。それが学びの連続性を保障していくカリキュラム編成につながると思う。相互理解の教育課程を構築したい。

支援の三角形

学校教育スタッフ　指導主事　岡田　文

今年度が始まった４～５月ごろ、各市町で行われた特別支援教育コーディネーターの会に参加しました。その時、この「支援の三角形」を紹介しました。この「支援の三角形」は、浜田高等学校がインクルーシブ教育システム推進センター校となり、その取組を周知するためのリーフレットに示されていた「高校の特別支援教育の考え方」を基にして、私が各種資料を参考に小中学校用として作成したものです。

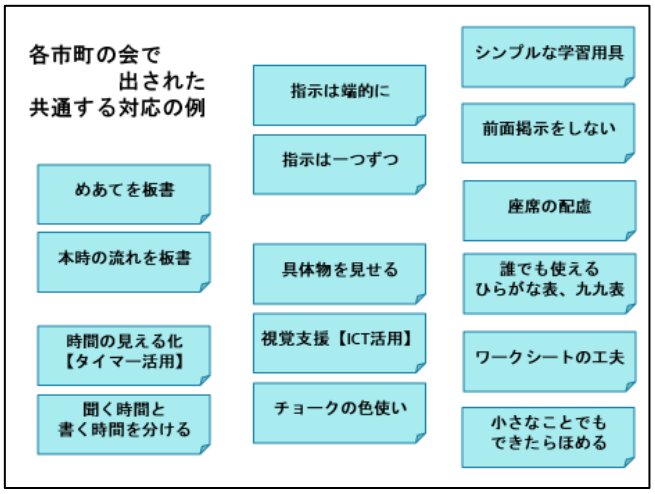


特別支援教育というと特別支援学級や通級による指導が思い浮かぶと思いますが、それはこの三角形の一番上、専門的対応に当たるところです。この専門的対応はもちろん大事ですが、その土台となるのはお互いを認め合える学習集団の上にのっている「共通する対応」です。ここは、すべての児童生徒が対象です。通常の学級の授業の中で、「集中できない」「理解ができない」などの児童生徒の様子に対して、この「共通する対応」が十分に行われているかどうかという視点での確認が必要です。そして、この部分が充実することで本当にきめ細かな対応や専門的な対応の必要な児童生徒が見えてきます。また、特別支援学級の児童生徒が交流及び共同学習として交流学級で学びやすくなるなど、この三角形の中を行き来する児童生徒が増え、「必要な支援」を「必要な場で」「必要なときに」「必要なだけ」受けながら、生き生きと学ぶことにつながります。

特別支援教育コーディネーターの会では、全員が対象となる「共通する対応」について考える校内研修を提案しました。「共通する対応」として、どのようなことが考えられるか、実際にやっておられること、できそうなことを教職員で出し合うものです。もうすでに様々な対応をしておられる先生から紹介される取組が、まだ十分に対応できていない先生のヒントになったり、同じ対応を試みる先生方が増えたりすれば、教職員が同じ方向性で児童生徒に接していくことになり、校内体制の充実につながります。下の図は、校内研修ミニ体験として行った際に特別支援教育コーディネーターのみなさんが出された対応の一例です。

各校の特別支援教育コーディネーターのみなさんを通じて、すべての学校でこの「共通する対応」を考える場をもっていただきたいです。１学期や夏休み中に「支援の三角形の演習を校内でやってみた」という声をいくつかの学校から聞いています。

毎日の授業の中での先生方のちょっとした工夫が児童生徒の「学びやすい」につながります。このような視点で教室や授業を見直してみませんか。

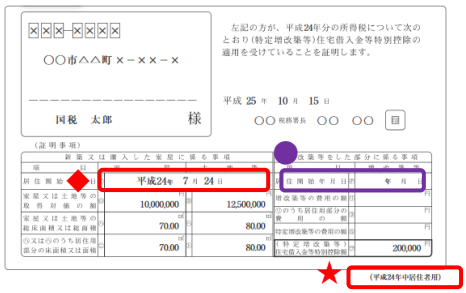


総務課スタッフより

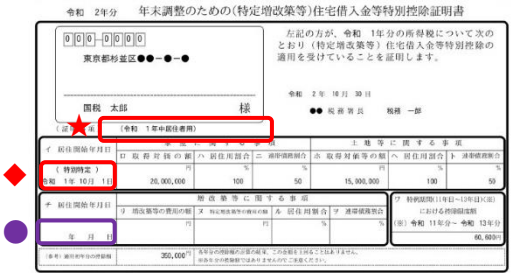
住宅借入金等特別控除申告書の控除区分について

早いもので今年度も折り返しを過ぎ、年末調整の時期が近づいてまいりました。今回は住宅借入金等特別控除（いわゆる、住宅ローン控除）の控除区分の確認方法についてご紹介します。

平成 30(2018)年以前の居住者



令和元（2019）年以降の居住者



		★部分「平成〇年中居住者用」以降の記載 なし	★部分「平成〇年中居住者用」以降の記載 認定住宅用
◆部分 居住開始年月日以外の記載	なし	0：現行	4：長期優良
	(特定)	12：現行（特定取得）	14：優良（特定取得）
	(特別特定)	16：現行（特別特定）	17：優良（特別特定）

		●部分に居住開始年月日が記載されているもの
●部分 居住開始年月日以外の記載	なし	2：特定増改築
	(特定)	13：特定（特定取得）
	(特別特定)	—

各市町の取組　～江津市～

「学校って何するところ？」

江津市教育委員会　派遣指導主事　泉　裕子

今年度、江津市で幼小連携・接続を進めるにあたり、研修を実施し、実際の子どもや先生の姿を通して幼児教育施設、小学校がお互いに理解を深めています。先日、訪問した幼児教育施設で０歳児から年長児まで全ての年齢の子どもたちが一斉に外遊びをする様子を見ました。子どもたちがだんだんと成長していく様子を目の当たりにすると学びや環境などの連続性が大切であると改めて感じました。

先ほどの市内幼児教育施設での出来事です。子どもたちはたくさんの大人に興味深々です。そんな中、１人の年長児さんが私に話しかけてきました。Q.「先生は何の先生？」A.「中学校の先生だよ」Q.「中学校？中学校って何するところ？」私はこのストレートな質問に何をどう伝えたらいいのか分からず、一瞬固まってしまいました。

子どもの素直な「学校って何するところ？」の質問について改めて考えてみると、様々なことが浮かんできます。そして今たどり着いたのは「小学校」「中学校」という場は決して教育の特別な場所ではなく、人生に連続してあるステージの１つだということです。「学校」で学んだことがその先にある子どもたちの毎日の生活や実際の人生に役立ち、未来へとつながっていく。学校での学びがこれからの子どもたちの予測不可能な未来を生き抜いていくための強い味方となるのです。

文部科学省から発行されたＨ２９年改訂学習指導要領のパンフレットを改めて見てみるとこうあります。「学校で学んだことが、子供たちの『生きる力』となって、明日に、そしてその先の人生につながってほしい。」あの年長児さんとの出会いが、学校での学びが子どもたちの未来につながっていることを再確認する機会になりました。子どもたちの“Well-being”を目指していくために、私たちに何が求められているのか…。学校で子どもたちの学びのためにご尽力いただいている教職員の皆さんとこのような教育のベースとなる視点を共有することを大切にしていきたいと思います。

“させる指導”から“支える指導”へ

江津市教育委員会　派遣指導主事　小田　公弘

夏休み始めのところで、市内小中学校を学校訪問させていただき、１学期の様子を伺いました。問題行動報告に関わって不登校や生徒指導上の課題について聞き取りをしました。依然、不登校の状況は厳しく、昨年度に引き続いて不登校状況にある児童生徒が複数名いる状況です。不登校については、なかなか解決の糸口も見いだせないケースもあります。

そうした中で、昨年「生徒指導提要」の改訂がされ、生徒指導研修会等でもその内容についての研修が実施されました。その中で、印象的だったフレーズが“させる指導”から“支える指導”です。

提要の中では、「生徒指導は、児童生徒が自身を個性的存在として認め、自己に内在しているよさや可能性に自ら気付き、引き出し、伸ばすと同時に、社会生活で必要となる社会的資質・能力を身に付けさせることを支える働き」とされています。ここに、これからの生徒指導の方向性が示されているように思います。「できないこと・できていないこと」への指導ではなく、「できるように」事前にどう支援していくかが大切だと考えます。そのためには、困っている児童生徒の背景をしっかりみとって、阻害している要因を取り除くための支援を積極的にしていくことが必要です。そして、一人ひとりの児童生徒が成功体験を多く積むことが、一人ひとりが自身のよさに気付いていくことにつながります。こうしたことが“支える指導”になるのではないかと思います。いずれにせよ、生起している諸課題は、その要因も多様化していて、一人で立ち向かうことは難しく、組織的に取り組むことが大切です。そのための学校支援、コーディネートをしっかしていきたいと考えています。

一人ひとりが力を発揮できる社会の実現に向かって(雑感)

江津市教育委員会　派遣社会教育主事　佐々木　努

７年間の社会教育現場を経て、昨年１年間は学校現場、そして、この４月から、江津市教育委員会で派遣社会教育主事として勤務しています。江津市では、１０数年ぶりに派遣社会教育主事が配置されたのですが、ふるさと・キャリア教育やコミュニティ・スクールの立ち上げ、今年度江津市で開催する県事業の公民館研究集会、義務教育から高校までの教育魅力化等、携わる業務は幅広く、日々奮闘しています。

６月頃、市内の地域コミュニティ交流センターを巡回したのですが、そこで聞いたのは、「コロナ禍の影響もあり、学校との関係が希薄になった。地域行事も見送ってきた。」という寂しい話でした。しかし、「これを機に、昔から継続してきた事業を見直し、参画者に負担がかかり過ぎないように工夫している。」という前向きな捉え方をされているところもありました。同じことに取り組んでいても、楽しく取り組む人と負担感だらけの人がいます。その違いは、「主体性」「満足感」ではないでしょうか。肩書きで集められ、「やらされ感」一杯で取り組む人たちよりも、興味があり、やりたいと思う人が集まった方がはるかにいいアイデアが出ます。もちろん、活躍してほしい人への意図的な声かけも必要です。

働いていて感じることは、「これって、学校教育と同じだなあ。」ということです。携わる社会教育業務の根底にあるのは、「人づくり」の理念です。学校で子どもたちを指導する技術や考え方が、学校教育外で生かすことができる、これが学校籍の社会教育主事・士が県内に多く配置されている理由の一つだと思います。地域づくりにおいて、社会教育、学校教育においても、一人ひとりが何かの場面で活躍し、「満足感」「役立ち感」が得られると、「当事者意識」が芽生え、次の主体的な動きにつながりやすくなります。そのように考えると、主体的に動こうとする大人や子どもを支える社会教育主事や学校の教員は、とてもやりがいのある仕事だなあとつくづく思う毎日です。

各市町の取組　～川本町～

早期発見・早期対応の大切さ

川本町教育委員会　派遣指導主事　市山　剛

川本町教育委員会での勤務が２年目になりました。

今年度開催した町内幼児教育施設、小中学校、高等学校教職員対象の研修会について紹介します。

８月２４日（木）に 竹内発達支援コーポレーション 代表 竹内吉和 氏を講師としてお招きし、「発達障害の理解と対応や支援」と題してご講義いただきました。

講義の中で、「発達障がいは、親のしつけや教育の問題ではなく、脳機能の障がいによるものであり、そのために特性を変えることは難しく、その子にとって過ごしやすい環境の調整が大切」「早期発見・早期対応ができなければ、叱られる場面が増え、自己肯定感が下がり、いじめや不登校などの二次障がいにもつながる」という話がありました。

また、特別支援教育の１丁目１番地は「実態把握」であるという内容もあり、学習する力について、

１．聞く力　　２．話す力　　３．読む力　　４．書く力　　５．計算する力　　６．推論する力

の正体や支援の方法を実際に模擬体験を交えながら、分かりやすく説明していただきました。実践的で参考になる内容で２時間の研修時間があっという間でした。全てを説明していただくには時間が足りず、参加された先生方からは、次回にぜひ続きを聞きたいという声が多数よせられ、関心の高さを感じています。

傾向が顕著に現れ始める子ども時代に、できるだけ早く、それぞれの向き不向きや力を発揮しやすい環境や声がけなどを把握して導くことで、成長後も社会で自分の力が発揮できると感じました。

２学期が始まりました。各学校と連携をとり、少しでも学校を支えていければと思います。

体験・協働

川本町教育委員会　派遣社会教育主事　佐藤　徹

夏休みの７月２５日から、小学４年～６年を対象に５日連続の体験プログラム「２０２３かわもとサマーチャレンジウィーク」を実施しました。

毎回、はじめの１時間を学習タイムとし、その後、午前の活動、昼食をはさんで午後の活動です。１日目「レールバイク」「カレーづくり」「染色体験」、２日目「バーベキュー」「SUP・カヌー体験」、３日目「川本町ふるさとカルタ」「そうめん流し・鮎料理」「川遊び」、４日目「竹で水鉄砲づくり」「竹ご飯づくり」「カローリング」、５日目「かずらで籠づくり」「ピザづくり」「e スポーツ体験」でした。

自然の中で、子どもたちの嬉しそうな歓声が響き渡った５日間。自然の中にどっぷり浸かって、川本のよさを改めて体感したことと思います。

この活動には、町内を中心に１１の団体・個人の方々にプログラムの主体者として子どもたちに多様な体験活動を提供していただきました。どのプログラムも子どもたちの可能性を広げる地域学校協働活動でした。また、「あそラボ（多世代交流ができる地域活動グループ）」を通じて参加した中・高校生、大学生等のボランティアスタッフが子どもたちを支援しながら交流を深めたことも川本町らしさです。今年が最後の「サマチャレ」となった６年生の中には、中学生になったらボランティアで参加したいとの声もあり、体験と協働の好循環が期待できそうです。

川本町は、令和６年度４月から各小中学校がコミュニティースクール（以下ＣＳ）としてスタートする予定です。「地域とともにある学校」としてＣＳが機能するためには、今回の体験プログラムをはじめ、町全体で地域学校協働活動のさらなる活性化と地域学校協働本部の体制づくりが必要と考えています。